

報告者：イダマルゴダ・バヌカ（東京大学）

報告タイトル：イギリス領セイロンにおけるアヘン反対運動—在地社会の「連帯」とジョン・ファーガソン

要旨：

アヘンの流通問題は、イギリス帝国とアジア植民地の関係を論じる上で避けては通れない重要課題である。

イギリス領セイロン（現スリランカ）では、アヘン販売店が開設され、免許制度に基づくアヘンの販売がセイロン政庁の条例により公認された 19 世紀後半より、嗜好品としてのアヘン吸煙が在地社会に広がった。これを問題視したセイロンの英字新聞「セイロン・オブザーバー」紙の編集長ジョン・ファーガソンは、自身の紙面でアヘン反対論を展開した。セイロンのアヘン反対運動はイギリス本国のアヘン反対運動とも連動して展開され、1893 年 12 月 9 日の集会で最高潮に達した。その翌年には、様々な民族・宗教コミュニティの出身者 3 万人余りの署名からなる嘆願書が立法府に提出された。

コミュニティ横断型で展開されたセイロンのアヘン反対運動は、仏教復興運動に基盤を置く社会運動が主として展開されていた当時においてはかなり特異な例であるといえる。本発表では、一次史料から読み取れる、ジョン・ファーガソンをはじめアヘン反対運動に関わった人々の語りや動きを辿ることで、セイロンにおけるアヘン反対運動を、他地域との相互作用や思想連鎖の観点で捉え直すとともに、セイロンで高揚していた仏教復興運動との関係についても検討し、セイロン史研究における本問題の位置づけを明らかにする。

主催：日本南アジア学会月例懇話会

共催：東京外国語大学南アジア研究センター

参加登録はこちら。登録期限：2023 年 7 月 20 日

<https://forms.gle/s2pi64Gj9qn2PCre7>